

第135回 三方限古典塾（'18, 1, 18）

呂 新吾（1536～1618）「呻吟語」（その8）

- 1 難きを先にし獲るを後にす。これはこれ徳を立て功を立てる第一箇の張主なり。若し難きを先にするの是なるを認め得、ただ一向に持循し去り、任い千毀万謗すとも、又心を動かすなく、年にかくの如く、月にかくの如く、竟に効驗なきも、またただかくの如く、久しければ則ち自から獲ざるの理なし。故に工夫は序に循いて以てこれを進め、効驗は従容として以てこれを俟つ。若し速やかならんと欲せば、便ちこれ苗を掘く者にして、自からこれ速ならんと欲し来たらず。（談道）

（意識） 困難な課題から先に取り組み、成果は後で楽しむ。これこそが人格を完成させ、仕事を達成する第一の秘訣である。このことを肝に銘じてどこまでも堅持して、例えどのような批判を受けても動揺することなく、かりに一年続け、一月続けて効果はなくても、ひたすら続ければ、長い間には必ずや自ずから成果が期待できるのである。

だから物事はこのように段階を追って進めながら、効果が現れてくるのをじっと待たねばならない。効果をせっかちに期待するのは、むりやり苗を伸ばそうとして引き抜き枯らすようなもので、どだい無理な話である。

（余説） ここで言っているのは、主に仕事に取り組む場合なのかもしれませんが、同じように必要とされるのは「己を磨く」ためであるように思われます。それには順を追って、成果を急がず、絶えざる不断努力が必要です。この章は第132回の3での「畑の苗の成長を早めようと苗を引っぱり枯らした」という孟子の「助長」の話と関連します。

（参考） 論語・雍也22「仁者は難きを先にして獲るを後にす。」（仁者は、困難な問題に率先して取り組む過程を第一として、報酬・結果は第二とするものだ。）

- 2 衆、これを惡むも必ず察し、衆これを好むも必ず察するは、易し。自らこれを惡むも必ず察し、自らこれを好むも必ず察するは、難し。（人情）

（意識） 人々が何を嫌い、何を好んでいるのか、それを察知するのはまだやさしい。真に難しいのは、自分が何を嫌い、何を好んでいるのか、それを察知することだ。

（余説） なぜ「自分を知る」ことは難しいのか。それは自分にはどうしても甘さがでてくるからかも知れません。自分に対する甘さを克服し、人を見る目に磨きたいものです。

（参考） 呻吟語・談道「彼を知り我を知るは、独りこれ兵法のみならず、人を処し事を処するに、一些も少き得ざる底なり。」

孫子「彼を知り己を知れば、百戦殆うからず。彼を知らず己を知らざれば、戦うごとに必ず殆うし。」

老子・上篇 33「人を知る者は智なり。自ら知る者は明なり。人に勝つ者は力あり。自ら勝つ者は強し。」（智：智慧 明：明智）

ソクラテス「汝自身を知れ」（真の知恵者とは、自分は真理が理解できていないということ認め、初心の心を忘れず、いつまでも食欲に学び続ける姿勢をもつ。）

道元・正法眼蔵「仏道をならふといふは、自己をならふなり。自己をならふといふは、自己をわするなり。自己をわするといふは、万法に証せらるるなり。」

3 胸中に一箇の見識あれば、則ち粉雑の説に惑わされず。一段の道理あれば、則ち鄙俗の目に撓されず。詩に曰く、「先民をこれ程とするに匪ず、大猷をこれ経とするに匪ず、これ運言をこれ争う」。平生、聖賢の書を読み、其の事はこれと合い、其の事はこれと背く。即ち適従する所を知り、去取するところを知る。否ざれば則ち口は詩書にして心は衆人なり。身は儒の衣冠にして行は鄙夫なり。これ士の稂莠なり。(修身)

(意識) 胸中にしっかりした見識があれば、まぎらわしい雑駁な議論に惑わされない。ひととき優れた道理があれば、卑しくつまらぬ意見に乱されることもない。『詩経』には「聖賢を模範とせず、大道を手本とせず、目先の議論ばかりに明け暮れる」とある。

ひごろ聖賢の書を読んでいると、現実にはその教えと合致するところもあるし、しないところもある。だから自分なりに考えて取捨選択することが重要なのである。

そうでなければ、口では『詩経』や『書経』を説いても心は凡夫と同じである。身には儒の衣冠をつけていても、行いは田舎者と同じである。これが人を害するものになる。

(余説) 見識とは、単なる知識ではありません。知識を吸収し、それを自分なりにかみ砕いて血肉として身につけた自分なりの判断力です。だから、どんなによい本を読んでも、それを鵜呑みにしたのは、本当の見識を身につけることはできません。

特に歴史書については、後に勝ち残った側に都合のよいことのみが書かれていることが多く、どこまでが真実なのかについて、古文書等で十分に研究する必要があります。

(参考) 孟子・尽心下3「尽く書を信ずれば、則ち書無きに如かず。」(書=書経)

(書物に書いてあることを一から十まで真実と信じるくらいなら、むしろ書物がないほうがましだ。)

磯田道史・日本史の内幕「日本の出版文化ぶりは、世界を見渡しても類例がない。」

「本こそが日本を作った。」 「幕末の日本もまた、本が動かしたといってよい。」

4 凡そ智愚は他なし。書を読むと書を読まざるとに在り。禍福は他なし。善を為すと善を為さざるとに在り。貧富は他なし。勤勉なると勤勉ならざるとに在り。毀誉は他なし。仁恕なると仁恕ならざるとに在り。(修身)

(意識) 智愚の分かれ目は他でもない、本を読むか読まないかにある。禍福の分かれ目は他でもない。善を実行するかしないかにある。貧富の分かれ目は他でもない。勤勉であるかないかにある。毀誉の分かれ目は他でもない。思いやりがあるかないかによる。

(余説) 下記・参考の章では「貧富・貴賤・得失・榮辱は、自然に任せて四季の去来するようにある」と考えますが、さらにその差は何によって生ずるのかを述べています。

すべては、その人の有り様によって異なり、要はいかに生きるか、いかに生きたかであろうと考えます。

(参考) 呻吟語・修身 70「我が身にはもと貧富・貴賤・得失・榮辱の字なし。我はただこれ箇の我なり。故に貧富・貴賤・得失・榮辱は、春風秋月のごとく、自ずから去り自ずから来たり、心と全く牽掛せず。」

(われわれ自身には、もともと貧富・貴賤・得失・榮辱という字はないのである。私はただ一箇の私である。だから貧富・貴賤・得失・榮辱は四季が移り変わるように自然に去り、自然に来るもので、その人の心とは全く関わり合いはないのである。)